



# アメリカ浄土真宗に学ぶ

Takashi Miyaji さんへのインタビュー

## 第3回 宗教と平和 (前半)

「宗報」(八月号)では、「アメリカ浄土真宗に学ぶ②——同性婚をめくって」をテーマにミヤジ・タカシさんにお話しいただきました。今回のテーマは「宗教と平和」(前半)です。戦後七一年目を迎えましたが、今なお世界では紛争が絶えることがありません。平和な世界の実現に浄土真宗はどのような役割を担えるのか。宗教が持つ価値を発信することの大切さを訴えるミヤジさんが、平和をめくって、アメリカで親鸞聖人の人間観を伝えることの重要性についてお話しください。

### 大統領の広島訪問

今年の五月にオバマ大統領が広島を訪れたことは記憶に新しいでしょう。その際に大統領は、

「道義的な目覚め」(Moral awakening)をめぐっては、それが一体何を意味しているのか、理解できなかったという人は少なくて知られるだろう

というメッセージを發しました。この

「道義的な目覚め」(Moral awakening)をめぐっては、それが一体何を意味しているのか、理解できなかったという人は少なくて知られるだろう

なくないようです。個人的な意見ですが、この「道義的な目覚め」が指す意味を理解するためには、アメリカにおける「宗教と平和」の問題について知っておく必要があると感じています。なぜなら、「道義的」と訳される moral は、往々にして宗教によってもたらされると考えられるからです。

### 宗教の戦争協力

以前、ビクトリア・ブライアン (Victoria Brian) という仏教学者が、Zen At

### アイデンティティの揺らぎ

ところで前回(「宗報」八月号)も触れましたが、日系人は昔も今も、「自分は一体何者か」というアイデンティティの揺らぎを抱えながら過ごしています。そのことは先の大戦の際も非常に顕著でした。アメリカでは外国人として扱われ、日本からは敵国のアメリカ人と見なされる。どこにいても不利な状況に置かれた。他国に派遣された多くのアメリカ

人兵士たちのなかで、日系人がまず危険な戦場に送られた歴史がそのことを物語っています。こうした状況のなかで、アイデンティティの揺らぎを常に持ち続けてきたのです。

### 国家によるアイデンティティ操作

重要な点は、「人種のサラダボール」などと表現されるように、多民族が共存するアメリカでは、今も日系人だけでなく、多くの人がアイデンティティの揺ら

War (日本語訳『禅と戦争——禅仏教は戦争に協力したか』二〇〇一年)という本を出版して大変話題になりました。その頃アメリカでは、キリスト教などにはない身体性をともなう座禅が人気を集め、仏教=Zen (禅)と考えられるほどに Zen ブームが沸き起こっていました。そのような中、Zen が実は先の戦争に協力していたことが本書によって指摘され、自分たちが抱いていた Zen 認識との隔たりに、人びとは動揺したのです。

Zenに限らず、浄土真宗も戦争をサポートした歴史があることを知らないアメリカの信徒の方も少なくありません。「まさか浄土真宗が……」とショックを受ける方は案外多いです。人びとの心や価値観に携わる宗教は、アメリカだけに限らず、戦時に「心を動員する」役割を果たしてしまうことが少なくありません。やはり、こうした宗教が持つ危険性に普段から注意を向けておくことが重要だと思えます。



Takashi Miyaji (宮地 崇)

一九八四年アメリカ・ユタ州生まれ。二〇〇六年、カリフォルニア大学バークレー校哲学科卒業。この間、慶應義塾大学へ一年間留学。二〇一一年、IBS (米国仏教大学院 修士課程修了。二〇一三年から二〇一六年まで、龍谷大学大学院修士課程及び博士課程に在籍。現在、本願寺派総合研究所臨時職員、龍谷大学研究生の傍ら、浄土真宗聖典英訳翻訳委員会でも英訳にも携わる。

ぎと葛藤しながら生きていくということ。」「アメリカの思春期」という言葉がありますが、それはまさにアイデンティティが不確定な状況に悩む人びとの状態を表わしています。「アメリカ人」といつても、その実態は本当に多様です。

だから国家が、国民に同じ方向を向かせて国を動かそうとする時、「私たちは一つなんだ」と意識させ、鼓舞する必要があり。その場合にしばしば行われるのが、「共通の敵・仮想敵」を探すということ。共通の敵が見つければ、自分たちは一つになれると考えるのです。よく、宇宙人が攻めてきたら地球人は争いをやめ、互いに協力し合うことができる、などという話が聞かれますが、それに近い考え方だと思います。

アメリカが「共通の敵」を見つけた最近の事例として、イラク戦争が挙げられるでしょう。

イラクでは、大量破壊兵器を理由に彼らを「共通の敵」と見なし侵攻しました。しかし、ついに大量破壊兵器は発見

されませんでした。犠牲だけが残った状態に、アメリカ国民も次第に国家に対して疑念を抱くようになっていきました。自分たちの正義が本当に正しかったのか、問い始めています。いずれにしても、国家を成立させるためにアイデンティティが操作され、戦争に利用されるということが起こっています。

### 多様性の確保と宗教の役割

私は、意図的に仮想敵を作って自己を確立しようとしたり、統一的なアイデンティティを設定しようという態度に、そもそも問題があると思います。無理な「アメリカ人」像の押しつけは、結局、そこに収まりきれない人びとを抑圧し、排除された人びととの争いを生じさせるのです。

国が「一つになろう」と動くとき、宗教はそのリクエストに安易に従うのではなく、むしろ異なる価値を積極的に訴えることが重要です。アメリカの場合、保

守派はキリスト教思想を背景としています。一神教的な価値観によって政治を動かそうとします。そこにどの程度、多様な価値観を訴えることができるのか。そこで、キリスト教以外の宗教が重要な役割を担うのです。それはつまり、浄土真宗を含む多様な宗教が、どの程度異なる意見や視点を提示し、多様性を支えることができるのかが問われているということです。

### 「無明煩惱」という人間観

多様性を維持するためにも、アメリカで親鸞聖人の「無明煩惱」という人間観をもっと訴えたいと私は思っています。人間が根本的に「愚かさ」や「自己中心性」を備えた存在だという認識や、それを「慚愧」するという態度は、国や宗教を超えて通用する考え方だと信じています。

残念なことに、アメリカでは法話などで「愚かさ」や「自己中心性」、「慚愧」

といったテーマは避けられる傾向にありました。なぜなら、法律に触れることもしていないのに、「愚かだ」と言われることをアメリカ人は極端に嫌うからです。私も以前、ある開教使さんに「アメリカでは煩惱や慚愧の話はしないほうがいい」とアドバイスされたことがあります。しかし、本当にそれでいいのでしょうか。リクエストされないから真宗教義の最も基本的な考え方に触れないという姿勢には疑問を覚えます。リクエストされない居心地の悪いような内容を、いかに皆さんに聞いてもらえるか、そこが僧侶の腕の見せ所だと思うのです。

真宗のみ教えを通して、一人ひとりのエゴを見つめ、内省的に考えて行動する、という態度がアメリカには非常に欠けています。自己の限界・欲望を見据えたところから他者を認め合うためには、やはり親鸞聖人の人間観は重要です。大統領が述べた「道義的な目覚め」について、少なくともアメリカでは宗教が大きな役割を果たしています。「絶対的に自

分が正しい」という正義を振りかざすアメリカの風潮に異を唱え、浄土真宗のみ教えを伝えつつ行動することで、平和な世界、すなわち自他共に心豊かな世界が実現される一歩となるのではないのでしょうか。

次号でも引き続き、「宗教と平和」(後半)をテーマに、アメリカ浄土真宗の具体的な活動などについて、お話しいただく予定です。

(本願寺派総合研究所 教団総合研究室)